

P.スタンスキー、W.エイブラハム著

『作家以前のオーウェル』を読んで

西川 伸一

今号のテーマにドンピシャのP.スタンスキー、W.エイブラハム、浅川淳訳『作家以前のオーウェル』(中央大学出版部、1977年)を読んだ。その感想を記することで寄稿者としての責めをふさぎたい。

一読して最も気になったのは、「オーウェル以前」のエリック・ブレアに付される「冷笑的」という形容詞の多さである。私が気づいた限りで、本書でそれは15か所も出てくる。「内気」(および/もしくは)「無口」は13か所にのぼる。これらの形容詞が彼の性格を雄弁に物語っている。要するに、「作家以前のオーウェル」の心象風景は「暗い」の一言に尽きる。当然それは権力を突き放してみつめる、オーウェルの独特の陰影に富んだ作風に投影されていく。

この性格は、彼が旺盛な読書家であったことと無関係ではあるまい。子どものころから「大の読書家」(14頁)で、イートン時代には「早熟な読書家」(102頁)として目立っていた。ビルマでも「熱心に読書」(178頁)に耽っていたという。『動物農場』の着想に影響を与えた『ガリバー旅行記』は、最低でも7回は目を通している(15頁)。

あるいは、私には彼の父のあまりにも長い不在がこの性格を深化させたように思えてならない。そして、父子が「お互いに親しくしたということがなかった」(129頁)というから、その淋しさは想像するに余りある。

しかも、彼はわずか8歳で、パブリック・スクールへの進学準備を行うプレパラトリイ・スクールであるセント・シプリアン校で寄宿生活をはじめている。なので、彼の生育過程においては父親のみならず家族の愛情が慢性的に欠けていた。こうした生活に体が

本能的にあらがうかのように、彼は入校して1週間しておねしょをしてしまう。それが3度続くと、校長夫人は本人の前で来客に彼のことを、毎晩寝小便をする少年だと説明した。さらに、次にやつたら最上級生に打たせるつもりだと続けたのである。

「かれの不潔さを暴露され」それをもう一人の女性に聞かれるという屈辱について、「エリック・ブレア少年、そして大人になったオーウェルに対するその影響はいくら過大に評価しても過大すぎることはない」(33-34頁)と筆者らは述べている。予想されるように、この事件の夜もおねしょを繰り返し、翌朝彼は最上級生ではなく校長に乗馬用の鞭で「柄が半分に折れ」(35頁)るまで打たれた。

いま学校の部活動や柔道界における体罰が問題となっている。本書を読むと、おねしょに対する折檻ばかりか、名門イートン校でも上級生による下級生に対する体罰が日常化していたことがわかり、ちょっと信じられない不快な気分になった。

そのイートンを卒えると彼はオックス・ブリッジに進学する道を選ばなかった。「大学へ行かないことがこの作家形成の決定的な部分であった」(123頁)と指摘される。言い換えば、進学せずにビルマで5年間警察官として勤務したことが大きかったのである。そこで彼は「人びとをあたかも物であるかのようにあつかう」(170頁)仕事に嫌悪感を深め、それが帝国主義に対する憎悪に結びつけられていく。一方で、5歳のときから抱いていた作家になるという「抱負」と「確信」は、ビルマでいくら帝国警察官に徹しようとしても排除しがたかった。イギリスに帰国して、彼はついに作家への決心を固めるのである。

両親とりわけ父親からの猛反対にもまったくひるまず、彼はこの決意を義務感ないしは使命感のように受け止めていた。「天職の意識」(255頁)とさえ筆者たちは評している。彼は「駆り立てられているかのように書いた」(229頁)が、運命の女神は容易にはほほえまなかつた。

自らの経験をもとに心血を注いだ『パリ・ロンドンのどん底生活』は、ジョナサン・ケイプ社に2度断られ、フェイバー・アンド・フェイバー社にも拒否された。それでも思いがけずヴィクター・ゴランツの目に留まり、1933年1月9日にジョージ・オーウェルのペンネームで同書が世に出される。そして大好評を博する。絵に描いたような「逆転劇」である。

ゴランツに見出されなければ、『動物農場』も『1984年』もなかった。オーウェルの作家としての実力だけではこうはいくまい。おそらく彼とさして変わらない才能をもちながら、大成せずに終わった人も少なくなかろう。紙一重の差が人生を大きく染め分ける。オーウェルは運をつかんだのだ。

ここまで書いてきて、私は『カタロニア讃歌』にある次のやりとりを思い出した。
「機関銃を構えている機銃手たちに、写真をとってやったことがあった。銃口がまっすぐ私のほうに向いている。

「射つなよ」私はカメラのピントを合わせながら冗談半分にいった。

「ああ、だいじょうぶ、射たないよ」
次の瞬間、すさまじい咆哮^{ほうこう}が起こり、銃弾の流れが、私の顔すれすれに、それこそ顔をつん裂くように飛んでいった。コルダイト火薬の粉で、頬がヒリヒリするほど近くだ。(角川文庫版54頁)

狙いがわずか数ミリズれていたらどうなっていたか。やはりオーウェルはなにか持っていたのだろう。

本文中にはいつさい写真や絵がなく、2段組で細かい活字がびっしり並んでいて、読むのにやや骨が折れる。それでも、巻末に付けられた詳細な索引には筆者と訳者の本書にかける心意気が感じられる。